

The Black Create Summoner
黒の創造召喚師

II



幾威空 Ijui Sera

目次

本編 7

Extra Side Episode 231

ステータス紹介 279

**コクヨウ**

偵察に特化した
鷹型召喚獣。

リル

魔法戦闘に特化した
狼型召喚獣。

サクヅキ

近接戦闘に
特化した
少年型召喚獣。

フランメル

情報解析に特化した
少女型召喚獣。

キリア=レンリル

シルヴィアの妹。
リアンヌに教を請うべく、
魔の森へやってくる。

ユティス=レイヴィハリア

柔らかい笑顔の裏に
DSな性格を秘めた、
リアベルの街のギルド受付嬢
兼ギルドマスター。

**リアンヌ=クリストヴァル**

魔の森の端に居を構え、
魔法の研究に没頭している
ハーフエルフの美女。

シルヴィア=レンリル

リアンヌの弟子にして、
世話係も務める
エルフ族の女性。

ツグナ=サエキ

神様の手違いで死んでしまい、
異世界へと転生した普通の少年。
その際、オリジナルの魔物を呼び出す
「創造召喚魔法」を手に入れる。

ソアラ=レミトン

狐耳を生やした獣人の少女。
ギルドへの参加試験で
ツグナと出会いパーティを組む。

主な
登場人物
Main Character

本編

第1話 街中探索

「さて、と。これからどうすっかな……」

与えられた課題を見事にクリアして冒険者登録を果たし、晴れやかな表情でリアベルの街のギルドから出てきたのは、まだ幼さの残る男の子——ツグナ。サエキだった。先輩冒険者からふっかけられた因縁にもキツチリ決着をつけてスッキリした彼は、預けていた刀を受け取って再び腰に差し、一度ぐっと背を伸ばして頭の中をクリアにさせる。

予期せぬ事態があったためにすっかり昼飯を食いつぶぐれてしまったツグナだったが、まだ日は高く、暖かな陽光が頭上から降り注いでいる。

（だいぶ遅くなったけど、まだ日も出てるし、店に入ったら何かありつけるよな）

目の前の大通りをぼんやり眺めながら、ツグナはそんなことを考え、今後の行動方針を立てていった。

「うーん。まずは宿の確保か……？」

師匠であるリアアから、一か月間一人で生活するように言われ、この「リアベル」と呼ばれる街

に來たのは、つい先日のことだ。到着後すぐにギルドの登録試験を受けたため、この街のことはほとんど知らないと言ってもいい状態である。

（あの門番の人に聞けばいろいろ教えてくれるかな？）

ツグナの頭にまず浮かんだのは、門番としてこの街に雇われているロビウエルの顔だった。ツグナはこの街にやって来たときに、彼から「冒険者の証あかしであるギルドカードを見せれば、通行税の半銀貨が返却される」と言われたことを思い出す。彼ならば、宿や武器、食事処といった主要なポイントも教えてくれるだろう……そんなことを考えつつ、今後の方針を練った。

（まずはロビウエルさんに会って、半銀貨を返却してもらおう。次に、街の主要スポットについて話を聞く……と）

大まかな方針を立てたツグナが、まずは門へ向かおうと歩き出した瞬間——
「ねえ、どこにいくの？」

後ろから、聞き慣れた女の子の声がかけられた。

「どこに行くって……普通に街の中を歩くんだけど？ 昼飯もまだだし」

「私を置いて？」

ギギギ……と錆さびついた音が聞こえてきそうなほどぎこちなく振り向いた先には、ふくつと頬ほおを膨

らませて睨むソアラの姿があった。

その特徴的な狐耳を忙しなく動かすソアラは、「私怒ってマス！」という空気をモロに向けてくる。「いや、パーティは解散だろ？ 登録試験は終了しただろうに」

彼女とは、ギルドの課題をクリアするために一時的な協力関係をとっただけのはず。ツグナがすげなくそう告げた瞬間、ソアラは「う〜！」と唸りながら両手を伸ばし——ツグナの頬を引っ張った。「ふえっ！ ひよっ、待っ……！」

突然の事態に、ツグナは咄嗟に反応ができなかった。放って置いたら泣き出しそうな表情のソアラに、どうしたらいいのか対処法がさっぱり思い浮かばない。

「私はツグナとパーティを組むって決めた。ツグナもそれを認めてくれた」

「うあ？ うん……まあひようだな」

考えあぐねているツグナの耳に、なおも執拗に頬を引っ張り続けるソアラの言葉が届く。否定は許さないよ、と言いたげな空気を纏うソアラを前にして、ツグナには大人しく頷くという選択肢しか残されていなかった。

「メンバーはいつも、どこでも一緒。だから、私とツグナも一緒」

「えっ？ あのう……ソアラ、さん？」

頬を引っ張っていた手が離れるのを見届けたツグナは、おずおずと相手の顔を窺う。その視線の

先には何故か、背後に炎を纏う修羅が見えた。

「逃がさないから覚悟してね☆」

慈愛の籠る優しい表情で微笑む狐耳少女に、ツグナは額に噴き出る汗を拭くこともせず、ただひと言——

「ハイ……ヨロシクオネガイシマス」

と簡潔に応えたのだった。

その言葉に喜ぶソアラの姿を見たツグナが、「後で師匠になんて言おうか……」とそつと心の中でため息を吐いたのは、ここだけの話である。

そんなやり取りを終えた二人は、とりあえずツグナの考えた方針に沿って動くことにした。最初に向かったのは、門番のロビウエルのところである。だが着いてみると、生憎本人は非番だと告げられてしまい、とりあえずギルドカードを見せて半銀貨の返却手続きをしてもらう。手続きが完了して半銀貨が戻ってくるまで、大して時間はかからなかった。

その帰りに、詰め所にいた兵の一人が肩を落として絶望の表情を浮かべているのにツグナは気付いたが、「きつと自分には関係ないだろう」と思い直し、その場を後にした。

それからしばらく大通りを歩きながら、目につく店の軒先に並べられた商品を二人で見ている。

すぐに食事をして良かったのだが、ツグナはあえてそうしなかった。彼にとっては初めての街であり、目につくもの、聞こえてくるものが新鮮だった。暖かな日差しを浴び、街に響く喧騒を耳にしつつ、ツグナはソアラを連れ歩いた。

やがて二人は軽食店に入った。その店員にダメもとで宿を探していると伝えたところ、「それなら、この通りの先にある宿屋に行ってみたら？」と勧められた。ツグナのような「初めて街に来た客」の扱いには慣れているのか、店員の口調は滑らかである。

「どうする？」

「うーん。ロビウエルさんのお薦めは聞けなかったし、行くだけ行ってみるか。早くしないと空いてる部屋もなくなるだろうし」

思わぬ情報提供に、ツグナは礼を告げて店を出た。そして教わった道を歩いた先には、確かに一軒の宿屋がひっそりと立っていた。

古びた木製の扉を開けて中に入ると、早速小さな女の子が声をかけてくる。

「ようこそ木の葉月亭へ！ 二人とも泊まり？」

「俺はそうだが、コイツは——」

「私も泊まりで！」

勢いよく手を挙げてそう宣言するソアラに、「はあ!？」とツグナは呆けた顔を向ける。そんな彼

の気持ちを汲み取ってか、ソアラは申し訳なきように内情を告白した。

「うう。『冒険者になったら生活費は自分で稼げ』って家から半ば強制的に叩き出されちゃったんだよ……」

長い耳を頭の上に倒して両手の人差し指を突つつくソアラの様子を見たツグナは、思わず頭を掻いた。

「やれやれ。随分と厳しい家だな……それじゃ、泊まり二名で頼むよ」

「ほいほい。部屋は一人部屋二つでいいの？」

疑問形で訊ねる宿の少女に、ツグナは「何を当たり前のことを」と突っ込もうと口を開きかけたとき——

「二人部屋一つでいいよお」

そんな言葉が横合いから飛び出した。ツグナが振り向けば、「でへへ☆」とにやける狐耳少女の姿がある。

「オイ、俺は別に——」

「い・い・よ・ね★」

すっとわずかに目を細めたソアラの態度に、いつぞやのドS女王様を相手にしたときと同じ感覚がしたツグナはそれ以上何も言えずに黙ってしまふ。

「ちなみに、一人部屋二つよりも二人部屋一つの方が値段は安いよ。一泊半銀貨四枚で、食事込みなら半銀貨五枚だね。一人部屋を二つなら、これに銅貨が足される感じだけど、どうする？」

こんな援護射撃を受けては、ツグナの答えは一つしかないようなものだった。

「じゃ、ソレで……」

本意ではない返答をせねばならないことに、ツグナはがつくりと膝から崩れ落ちたい気分ではあった。けれどもこの街で生活する以上、余計な出費を抑えたいのは彼も同じである。隣で「よしっ！」と小さくガツポーズをとるソアラとは対照的に、ツグナはどこか腑に落ちない思いを抱えながらも、粛々と現実を受け止めるのだった。

ツグナが「とりあえず十日分」と代金を渡すと、レリリルと名乗った宿の少女は「はい、確かに」と慣れた様子で手続きを終えた。

「あ、ちよつと聞きたいんだが」

部屋の鍵を渡そうと手を伸ばしてきた彼女の手を制し、ツグナは声をかけた。

「ふえ？ なに？」

「この街に鍛冶屋とか武器屋はあるかな？ 装備を整えたいんだけど、この街に来たばかりでさ」

ツグナの質問に、レリリルは顎に手を当てながら話し始めた。

「うーん……それなら、目の前の通りの先に数軒あるよ。私はよく分からないけど、冒険者の人たちはそこで揃えてるみたい」

「目の前の通りの先、ね。ありがとう」

「すぐに出るの？」

「ああ。戻ったら飯と鍵を頼むよ」

「分かった。けれど、次の鐘が鳴ったら夕食の時間なんで、できればそれまでには帰って来てね」

「鐘？」

ツグナが反射的に訊き返すと、「ああ、この街に来たのは初めてなのね」と納得したのか、レリリルは説明を始めた。彼女によると、この街の時間概念は、地球と比べると非常にざっくりとした区分になっていた。

具体的には、三時、六時、九時、十二時の三時間ごとに「時告げの鐘」が鳴る。この時告げの鐘は、リズムよく三回鳴り響くものだ。それとは別に「刻みの半鐘」が一時間ごとに二回鳴らされるという仕組みである。

「なるほどな。分かったよ。そんなに遅くはならないようにするよ」

説明してくれたことに礼を告げたツグナとソアラは、レリリルに見送られながら再び通りへと繰り出したのだった。

「とにかく、まずは装備を揃えないとな」

「刀が傷んだんだっけ？ それは早く何とかしておきたいよね」

「それもそうだし、服も見っておかないと。いくつかストックしておきたいな。でもまずは刀からか」
ツグナの呟きに、ソアラは耳をびよこびよこ動かしつつ返答する。一緒に出歩くのが楽しいのか、ふさふさの尻尾がゆらゆらと揺れていた。

黒髪黒眼の少年に、狐耳とふさふさの尻尾をもつ少女。そんな取り合わせは道行く人の耳目を集めた。ただでさえ珍しい外見のツグナが、これまた特徴的な外見を持つ女の子と一緒に、嫌でも目立つというものだ。

「それじゃあ、あまり時間もないようだし——とりあえず見ていきますか」

「そうだね！」

そういつた視線に構うことなく、どこか嬉しそうに同意するソアラに、ツグナはカリカリと頭を掻きながら歩を進めたのだった。

第2話 新しい刀

「……なっかなか難しいな」

「うう。歩き疲れたよお」

町の中央に位置する広場で、ツグナとソアラはベンチに座り休息をとっていた。頬を撫でる冷たい風が心地よい反面、刻一刻と迫る期限を知らせてくるようでもあった。

木の葉月亭を出てから早二時間あまりが経過しようとしている。だが、状況は一向に改善していなかった。

「剣が主流だからって、これはナシだろ……」

隣でぐったりと背もたれに寄りかかるソアラの様子を見ながら、ツグナがため息を吐く。

「コイツは……刀か。悪いな。ウチでは取り扱ってないんだ」

「刀を直せるかって？ 俺は剣しか扱ったことがないんだ」

「というより、なんでお前さんは剣にしないんだ？ 刀は流通量が少ないだろうに。そんなんじゃあ、この先も困ることになるぞ？」

レリリルの情報を基に訪れた鍛冶屋や武器屋からは、どこからも同じような言葉をもらっただけであった。芳しく^{かんば}ない成果についての愚痴りたくなるツグナだったが、せり上がる焦燥感を無理矢理に呑み込むと、一度頭を切り替えるべく、ほんのりと茜色^{あかね}に染まり始めた空をぼんやりと見つめる。

「これほど歩き回ることになるなんてねえ……だいたい、なんでツグナは刀にしようと思ったの？」
いくらか回復したのか、ソアラからそんな疑問の声が上がる。ツグナとしては「そっちも特殊な武器を使うのに何言ってるんだ？」と返してやりたかったが、そんな気力もないため素直に答えた。

「なんで、って……こっちの方が使い慣れてるからかな」

「でもさ、剣にしようとは思わないの？ 刀は少ないのに」

行った先々で言われたことにも一理あると思っているのか、ソアラから重ねて質問が飛ぶ。彼女の率直な疑問に、ツグナは眉根を寄せて「どう言えば分かりやすいかなあ……」と思索しながらも口を開いた。

「いや、身体に染み付いたものを今さら変えろと言われても難しいさ。似たような武器だから誤解されがちだけど、剣と刀じゃあ、その性質も動作も全く異なるんだよ」

「動作も異なる？」

同じ「斬る」性能を持つ道具であるのに、それを使う際の動作が違うとは一体どういうことなのか……そんな態度を見せるソアラに対し、ツグナはおもむろに腰に吊った刀に手を伸ばす。

「ああ。剣は重さで『叩き斬る』という動作に適^{かな}った武器だから、刀身も厚く、真っ直ぐなものになる。逆に刀は『引き斬る』動作を主眼に置いた武器だ。鋭い切れ味を追求したために、刀身は薄くて反^そりがあつただろ？」

「確かにそうだったね。あの薄さだと、すぐに折れちゃうんじゃない……とも思っただけど」

ツグナの説明を聞きつつ、試験の際に見たことを思い出して、ソアラは軽く頷く。

「そこらへんは扱う人の技量次第だな。どんな優れた武器であれ、きちんとした知識と技術を持った人間に使われなければ、すぐにガラクタ行きだろうさ。俺は長い間刀を振ってきたから、そっちの動作が染みついてるんだよ。そんなワケで、今から剣を調達しても、扱いを習得するには時間がかかる。なら、今ある武器を使った方がよほどいいってこと」

肩を竦^{すく}めてそう話すツグナに、ソアラは感心したように頷く。そんなソアラをよそに、ベンチから立ち上がったツグナは「ほら、休憩は終わり！」と告げ、再び歩き出した。

「おっ、あつたあつた。ここだな」

裏通りの奥にひっそりと立つ一軒の店。その前まで来たツグナとソアラは、店名を確認すると躊躇^{ちゆうちゆう}なく扉を開けた。二人が入ったのは、先ほど別の武器屋から教わった店だ。いわく、「あそこの店主は相当な偏屈^{へんくつ}だけだな」とのことだったが、これまで成果のないツグナには背に腹はかえられ

ないと足を運んだのである。

「はいよ。この店は……って、何だガキじゃねえか」

カウンターから気だるそうに声をかけてきたのは、初老のドワーフの男性だった。毛むくじらの顔に、がっしりとした体格。身長はさほど高くもないものの、鋭く射抜くような目が二人の様子を窺うように動いていた。

「ガキで悪かったな。これでも冒険者の端くれなんだけど」

「はっ！ お前みたいなのが冒険者だと？ 冒険者なら——」

男が言い切る前に、ツグナは懐から真正銘本物のギルドカードを取り出してカウンターのの上に置いた。

この金属プレートに使用されている「リタリア鉱石」は、「魔力を記録する」という稀有な特徴を有しており、血を媒介にして特定の魔力の痕跡を刻むことが可能な代物である。指紋や声紋のように、一つとして同じパターンが存在しない魔力の痕跡——いわば魔力紋とも呼べるものは、偽造防止や個人の特定などに最適とされていた。

「おいおい、本物かよ……」

差し出されたギルドカードを確認したドワーフの店主は、幾度か交互にツグナとギルドカードを見る。ツグナの容姿が意外過ぎたのか、彼は少しばかり目を丸くして、静かにカードを返した。

「まあいい、それで？ お前さんは何を指望みだ？ 言っておくが、よその店で直せるようなモンだったら、こつちから願ひ下げだからな。そんなモンはここより腕のいいヤツがあちこちに店を構えているぜ」

「これを直せるかを聞きたいんだよ」

ツグナは「よそで直せないからここに来ただけだな」という返しを胸の内に呟きつつも、腰から鞘ごと刀を抜き取り、カウンターのの上に置いた。その瞬間、ドワーフの店主は訝しげな表情を浮かべる。

「コイツは……」

「ああ。戦闘で罅が入っちゃまってな。直せるかどうか聞いて回ってるんだ。けど、どこからも匙を投げられたんだよ」

「……抜いてみてもいいか？」

店主からの質問に、ツグナは何も言わず身振りで促した。鞘から引き抜かれた刀身に光が当たると、鮮やかな刃紋が照らし出される。

「ふむ……なるほど。こりゃあもうダメだな」

つぶさに刀身の状態を確認したドワーフの男は、パチンと鞘に戻して淡々と結論だけを告げた。

「『ダメ』って……直らないのか？」

困惑するツグナの様子を見た店主は、その顔を渋くさせつつも諭すように呟いた。

「直らないこともないが、状態が悪すぎる。ところどころ小さな刃毀れが起きてるし、なにより罅がデカ過ぎて、修理に時間がかかる。これなら新調した方が早いぞ」

専門家による診断結果に、ツグナは頭をガリガリと悔しそうに掻く。

「そっかあ。何げにその刀は気に入ってたんだけどなあ」

未練がましいツグナの呟きに、店主の耳がピクリと反応した。

「そんなに気に入ってたのか？」

「そりゃ、今まですつと俺の身を護ってくれた相棒だしな。これまで危ない場面を何度も救ってくれたんでね」

この感想は、ツグナの紛れもない本心だった。この刀は、この世界での親（今では縁を切ったよなものだが）の屋敷で出合つて以来、ずつと傍にいた相棒である。長い時間が経てば、身の回りの道具に愛着が湧いても不思議ではない。ましてや自分の命を預ける武器ともなれば、そんな気持ちになるのも当然だろう。

「そうか、そうか……相棒か……」

それを聞いてどこか感慨深げに何度も頷く初老のドワーフの顔には、どこか気恥ずかしさが見て取れた。

「うん？ どうしたの、このオジサンは」

「さあ？ 俺の方こそ聞きたいんだけど」

置いていかれたように感じているツグナとソアラの視線に気付いたのか、ドワーフの店主は「悪い悪い」と苦笑を浮かべると――

「この刀はな……俺が打つたものなんだよ」

ポカンとする二人にそう言つて、「まあ若い頃に打つたものなんだがな」と付け加えるのだった。

「しっかし、驚いたぞ。まさか昔打つた刀を再びこの目で見るなんてな」

ドワーフの店主は、カウンターのの上に置かれた刀をそつと撫でながら、小さく呟いた。目の端をわずかに下げたその様子は、まるで懐かしい友に再会できたことを喜んでいようでもあった。

「そんなに珍しいことか？」

「さあ？」

その言葉にツグナとソアラは揃って首を傾げる。

そんな二人を眺めつつ、「知らないのも無理はないと思うが」と前置きした上で、店主は話し始めた。「刀つっののは、そもそもの流通量が少ない武器だ。巷に溢れる武器のほとんどは剣とか槌、槍に弓なんだよ」

「それはそうだな」

「この店の前に行ったところでも、ほとんどがそうだったもんね」

確かに、二人が行った先々の店の壁面に掲げられた武器はどれも剣や槌、槍といったものだった。「生産職は『作ったら終わり』つつうわけじゃない。作った物を売って初めて生活ができる……だつたら、流通量の多いもの、多くの人間が使うものを作った方が金を得やすいわけだ」

「なるほど」

「確かに言われればそうだよね」

そこまで告げられて納得したのか、ツグナとソアラは互いに顔を見合せながら頷く。そんな二人の様子を見ながら、店主は話を続けた。

「そのせいで、刀を打てるヤツは少ない。需要が見込めんのだからな。だが、当時の俺はあらゆる武器を作ってみたくてな。時間はかかったが、満足のいくひと振りに仕上がったのがコレだったわけだ」

「へえ。オツチャン偉いっ！」

「褒めても何も出ねえよ……んで、仕上げてはみたもののほとんど誰も手に取らず、結局どっかの行商人に売り払ったんだがな。その後の行方なんて分からずじまいだ。まさか再び目にするとは思わなかったんだよ」

「でもおかしいな。コイツは見つけたとき、倉庫の中で埃かぶってたぞ？ それだけ時間が経ってるのなら、切れ味は悪くなってると思うが？」

屋敷の中で見つけたときの様子を思い出しながら、ツグナは首を傾げる。これは、「使えるから理由は後で考えるか」と放置していた疑問だった。

「ソイツには、酸化や腐食を防止する魔法をコーティングしてあるのさ」

「魔法のコーティング？ それにしても長く持ったな」

「はん、俺の知り合いにそういうのが得意なヤツがいたんだよ。『研究のためだ』つっては俺の作品を悉く使えなくしやがって……あのアマア。思い出すだけで腹が立つわ」

忌々しげに顔を歪ませたドワーフは、きよんとした顔を浮かべるツグナとソアラを見て頭を振ると、「何でもない」と言っただけで話を切った。

「まっ、何にしてもよかったネ！ ツグナが奇特な刀使いで！」

「余計な御世話だっ！」

ツグナは「黙ってる」と告げる代わりに、ソアラの鼻面に軽くデコピンをかましておく。「ふぎゃっ！」と涙をためて訴えるソアラだが、無視を決め込んで話を先に進めた。

「そっちの経緯は分かったけど、俺にはすぐにでも新しい刀が必要なんだ。新調するにしても時間がかかるだろうし、ここには置いてないのか？」



「ここにはないな。店を見たら分かるだろ？ 客なんざほっとんど来ねえんだよ」

「だろうな」

「うるせえ、ガキが」

やれやれと肩を竦めるツグナに、苦笑いを浮かべるドワーフの男。その顔には店に入った頃の刺々しさは既になく、どこか落ち着いた静かな雰囲気漂っていた。

「つたく、しゃーねーな。ちよつと待ってる」

ドワーフの男は何を思ったのか、カウンターから離れて奥の部屋に引込む。しばらくして戻って来た彼の手にはひと振りの刀が握られていた。彼はそれをカウンターに置くと、ニヤリと笑いながら「抜いてみな」とふてぶてしく告げた。

ツグナは、控えめに銀の装飾が施された漆黒の鞘を握り、静かに抜刀する。

「これは……凄いな」

「綺麗……」

思わずソアラも見入ってしまうほど、その刀は美しかった。前の物と同じく、薄い刃にわずかな反りを持たせた刀身は黒く染め上げられており、照らされる光の加減によってうっすらと波紋が浮かび上がる。一直線に走るそれは直刃すくはと呼ばれるもので、波打つ紋様とはまた違う美しさを宿していた。

ツグナは二、三度振ってみて、感触を確かめる。今までのものよりも多少重く感じられたが、その重さも心地よいとすら思えた。しつかりとした造りの柄も、ツグナの手に吸いつくように馴染む。「この刀は？」

納刀してカウスターに戻したツグナが訊ねると、初老のドワーフは小さく笑いながら答える。

「コイツは『瞬華終刀』だ。素材にした魔鋼は魔力をよく通す性質を持つから、魔闘技との相性はいいだろうよ。お前、魔闘技は使えるのか？」

「まあね」

頷くツグナに、ドワーフは「ならよし」と言いつて嬉しそうに頷いた。

「これは俺が打った刀の中でも最高傑作だ。おめえにやるよ。お代は気にすんな」

「えっ!？」

「い、いいのか？」

驚く二人に、ドワーフの男は苦笑して「懐かしいものを見せてくれた礼だ」と嬉しそうに小さく呟いたのだった。



「それじゃあオッチャン。またね!」

「刀を打てる人と会えて助かったよ。これからメンテナンスに来るようになるから、そんなときはよろしく頼むよ。こんな場所にいるんだから、どうせいつもヒマしてるんだろ。装備を修理してもらうついでに、話し相手ぐらいにはなるさ」

嬉しそうにはしゃぐソアラとは対照的に、ツグナはドワーフの店主に小憎たらしい言葉をかける。「ガキが余計な気遣いしてんじゃねえよ。俺はそんなに落ちぶれちゃあいねえつての。それより、下手な扱いしたら……分かってるだろうな？」

眉尻を上げて凄む店の主に、ツグナは腰に差した新たな刀の柄をそつと撫でながら悪戯っぽい笑みを浮かべて告げる。

「それを確認してもらうために定期的に来るんだろ？」

その言葉に、店主は「それもそうだな」と少しばかり相好を崩した。

「それじゃ、俺たちはもう行くよ」

「またね、オッチャン」

ツグナとソアラはひらひらと手を振って店を出た。既に夕暮れ時となっており、オレンジ色の陽の光が二人の後ろに長い影を作る。

「よかったね! これで明日からバンバン依頼を受けられるよ」

「ああ、このタイミングで無事に刀を手に入れられてよかった。ただ——」
「ただ？」

「そっちがドジっても、俺は助けないからな」

「何それヒドっ！」

慌てるソアラに苦笑を浮かべたツグナは、夕焼けに導かれるように宿へと戻っていった。

第3話 報告と忠告

「主い、これは？」

夕食を終えて部屋に戻ったツグナの前には、パタパタとコウモリに似た羽を動かし、紫色のツインテールを揺らしながら宙を漂う白衣姿の少女がいる。片眼鏡を通してテールの上に転がされた結晶を見ている彼女は、ツグナの《創造召喚魔法》によって生み出されたフランであった。

つい先ほどまで一緒にいたソアラは、街中を歩き回った疲れが出たのか、「もう無理……」とだけ告げて、さっさとベッドの中へと潜り込んだ。

陽はとうに沈み、窓の外には月と星が朧に輝いている。ツグナがチャリとベッドに目を向ければ、

びくびく小刻みに動くソアラの狐耳が目についた。誘われるようにベッドに倒れた彼女は、早速規則正しい寝息を立てている。

ツグナもベッドの中へと潜り込みたい衝動に駆られたが、それをぐっと抑えて魔書《クトゥルー》を用い、ツグナが「分析官」と位置づけているフランを呼び出したのだった。

「あのキメラバイトの核さ」

ギルドの試験が行われた森で謎のモンスターと出会い、激闘の末に得た戦利品がこれである。

「よくもまあ残っていたなあ。主に倒されてすぐ、身体は塵となって消えたのに……それで、私に何をしろと？」

ほうほう、と紅色の核に触り、色合いを確かめるかのように眺めていたフランは、視線を動かさずに訊ねた。

「解析頼むよ。すぐにできるだろ？」

言わなくても分かるだろ、と言いたげな苦笑いを浮かべるツグナに、フランは「それだけのために呼び出したのか」と頬を膨らませて不満を表す。

「もう倒した相手だろう？ どうして主はそこまで気にしているのだ？」

「……あれはどうも、いつもの魔獣や魔物の範疇からは外れているように思えてな」

フランは左右のツインテールを揺らしながら、片眼鏡をくいと上下させた。彼女もあの場にい

た一人として、キメラバイトの能力、特性、そして倒した直後にどうなったのかぐらいは知っている。「ふむ……成分や特性ぐらいは分かるだろうけど、詳しい製造過程までは分からないと思うぞ、主」
「構わない。そこまでではなくとも、何らかの手がかりにはなるだろうよ」

肩を竦めつつツグナが頼むと、フランは「分かった」と答えて、スキル《詳細情報解析》を発動させる。片眼鏡が月の光を浴びて、キラリと輝いた。

「……分かったぞ、主」

しばらくして、キメラバイトの核から視線を外したフランはため息と共にツグナの方を仰ぎ見た。ツグナはフランから核を返してもらおうと、「それで？」と先を促す。

「まず、これは人工的に造られたモノだな。それで、肝心の材料だが――」

一度言葉を切ったフランは、苦い顔でただ一言、吐き捨てるように呟いた。

「――人間だ」

「なんだって!？」

眉根を寄せて訊ねたツグナに、フランは首肯しつつ説明を続ける。

「この結晶核は、人間の血肉、骨、内臓を凝縮し、固形化したものだ。成分が完全に人間のそれと同じだったことから間違いはないだろう。それに特殊な印を刻むことで、あえて不完全になるよ」

うに仕向けてるな」

「不完全に？ 何故だ？」

「その答えは、あの生き物の特性を考えれば見えてくるんじゃないか、主？」

意地の悪い顔で告げたフランに、ツグナはなるほどと納得顔で呟いた。

「――吸収、か」

「その通り」

ピシッと指を立てたフランは、真剣な眼差しをツグナに向けたまま、さらに語り始める。

「自らを安定させるため、キメラは他者を取り込む……けれども、これは他者を取り込んだところで安定化することはない組み方のようだ。この刻印を施した者は相当に悪知恵が働くに見えるな」

「それじゃあ……」

「キメラは際限なく力を蓄えていき、それによって被害は拡大する、ということだ」

思わずうめいたツグナに、片眼鏡を上げたフランは嫌悪感も露わに顔を歪め、そう吐き捨てた。

「それにこの色と濃縮具合、加えてキメラの能力を鑑みると……この結晶核一つ造り出すのに、複数の人間が必要だろう。鮮度から見ておそらく――材料となった者は、生きたまま処置を施されている。死んだ者だとしても細胞が劣化するからな」

「生きたまま……だと？」

あまりにも恐ろしいフランの見立てに、ツグナは思わず口を挟んでしまう。フランは無表情のまま静かに頷いたが、その裏には哀しげな感情が宿っていることに、ツグナは気付いた。

「主よ、想像できるか？ 生きたまま溶かされていく者の怨嗟と憎悪を。自分が自分でなくなっていく感覚を。それを横目に、ただ化け物を生み出すことに邁進する者たちの狂気を……」

見れば、フランの身体は少しばかり震えていた。フランの持つスキル《詳細情報解析》は、構成物質や構造、成分情報に加えて、「刻まれた魔力の痕跡」をも正確に捉えることができる。

断片を把握し、全体を組み立て、見渡すことのできる「分析官」たるフランだからこそ理解できる「狂気と恐怖」だった。

「なるほど……そいつらは、そんなことまでして一体何を求めているのか……さすがにこれを調べただけじゃあ分からない、か」

「すまない、主……」

口惜しげに唇を噛んで俯くフランに、ツグナは「それが分かっただけでも前進だ」とその頭をぐしぐし撫でた。それから結晶核を一度月光にかざして、すぐにアイテムボックスの中へとしまい込む。「何はともあれ助かったよ。それじゃあ——」

仕事は終わりだと、ツグナは左腕からずるりと魔書を取り出す。だがその瞬間、片眼鏡をキラリと光らせたツインテール少女は、ニヤリと笑みを浮かべ——

「今日は一緒に寝てくれるんでしょ☆」

どストレートの剛速球を投げ放った。

「……へっ？」

「だって、あんな恐ろしいものを見ちゃったし〜。誰かが一緒にいてくれないと、安心できないし〜」

くねくねと身を振らせる少女の顔は、どこか「してやったり★」という黒い笑みに包まれている。「なっ！ おまつ……！」

何が何でも構ってもらおう気か！ と渋い顔を浮かべるツグナに、フランはケタケタと嬉しそうに笑う。彼女は自身の主である少年が優しいことを十分に知っている。だからこそ、こうしたからかい方ができるのだ。

「朝には戻すぞ。マジで」

「分かっているって★ 誰に向かって言ってるのさ」

にんまりと八重歯を見せながら笑うフランに、ツグナは一抹の不安を覚えるのだった。



「あら？ どうしたの、そんな顔して？ 嬉しいイベントでもあった？」
 ギルドへやってきたツグナを待っていたのは、満面の笑みで心のライフポイントを削ってくる受付のドS女王、ユティスだった。彼女にとって受付嬢は世を忍ぶ仮の姿であり、本当の立場はこのギルドのマスターである。

結局フランとの約束は果たされず、従者^{フラン}にしがみつかれたまま朝を迎えた。近くで寝ていたソアラにその姿をばっちり見られたツグナは、朝早くから狐耳少女にキツイ眼差しをもらうはめとなった。不機嫌なソアラを宥めているうちに時間は過ぎ、ギルドに着く頃には昼近くとなっていた。

冒険者という職業は割かし時間の使い方が自由そうなイメージから、朝はぐうたら……という想像が働いてしまうが、実際は意外と朝が早いことが多い。それは、依頼を受けるならば朝早くに受理手続きを済ませた方が都合がいいからだ。

ギルドから提示される依頼は、建物内に設定された掲示板を通してなされる。ここに張り出された依頼書を受付に持って行って手続きに進むのだが、この掲示板は朝に更新される。冒険者からすれば、朝に掲示板を見ないのは旨みのある依頼を逃してしまうことに他ならない。

また、街から離れた場所での討伐依頼や採取依頼などのためには、朝早くから現地向かう必要がある。前日から準備を行う段取りも必要となる。こうした理由から、必然的にギルドが最も混雑するのは午前の早い時間帯で、昼近くからは閑散とするのが常であった。一方夜は夜で、飲食する

者や依頼達成の報告を行う者などにぎわうのだ。

閑散としたギルドのカウンターでにやにや笑うユティスに対し、何を言ったところで無駄だと学習済みのツグナは、黙ってカウンターの上に紅色に染まった結晶核^アを転がした。

「……？ これは？」

不意に目の前に差し出された、砕けた固形物。これを買取って欲しいと言われたとしても、ユティスは「ちよつと状態が」と断つただろう。だが、ツグナの口から出た言葉は、そんなユティスの想像の遥か斜め上に行くものだった。

「——コイツはキメラの核だ」

ユティスは「キメラ」という単語に、ピクリと眉を動かした。ギルドマスターとしてのこれまでの経験から、その危険度は彼女も身に染みて分かっている。

「これはどこで？」

「登録試験に行った先の森で」

ツグナの即答に、ユティスの顔色はみるみる暗いものへと変化していく。幸いというべきか、人がほとんどいないこともあって、二人がどんな話をしているのかに気付く者はいない。

「……どうやって手に入れたの？」

「どうって……倒してだけど？」

何を当たり前のことを、と言いたげなツグナの返事に、ユティスは思わずポカンと口を開けて呆けてしまう。ユティス自身、幾度かキメラの討伐を行ったことがあるが、そのどれもが厄介な相手であった。

キメラは過去にも何度か現れ、その度に街や人を襲い、討伐されてきた。そうした記録は確かに存在しており、一部はやや脚色が見られるものの御伽噺おとぎばなしや伝承にまでなっている。だが、その時々によってレベルや外見が異なるため、未だに詳しい生態や発生条件等の説明は進んでいない。唯一、「取り込んだものの能力を使う」という厄介な特徴は共通しており、討伐には何人も熟練者を起用して当たるのが常套手段であった。

「……貴方、ホントに人間？」

「失礼な」

ユティスは詳しい経緯をツグナから聞いた後、ため息と共にそんな言葉を吐き出した。確かに今回のキメラは、レベルこそモンスターの中において「中の下」ほどに位置するだろう。だがその特徴は紛れもなくユティスの知るキメラそのものであり、実質的な危険度はレベルで表されるよりも数段高い。

「はあ……まあ貴方がそのキメラを倒したのはよしとして、一体何の用なの？」

ユティスは湧き上がる「どうやって倒したのか？」という疑問を棚上げし、ツグナとカウンター

の上に転がる結晶核コイッに幾度も視線を向けながら本題に話を進めた。

「用、というほどのものじゃないケド……いわば忠告？　みたいなものかな」

「忠告？」

穏やかならぬツグナの発言に、ユティスは顔を曇曇めた。もちろんユティスにしろ誰にしろ、面と向かって「忠告だ」と言われていい顔をする人間はいないだろう。これも当然の反応だと思いつつ、ツグナは口を開いた。

「キメラは街に甚大な被害をもたらす存在なんだろう？　俺の方で調べたところ、結晶核コイッはマトモな方法で造られたものじゃない。そんなものをバラ撒く輩やからがいるから注意しておいた方がよさそう
だ、っていう忠告だよ」

「なんで貴方に調べられるの——って、そうだったわね」

「そういうことだ……一応、忠告はしたぞ。それじゃあな」

ツグナが「解析」のスキルを持つことを思い出したユティスは、静かに頷いてカウンターから離れていく彼を見送った。

（キメラですって？　嘘だと突っぱねるのは簡単だけど、あの子にそんな嘘をつくメリットはないし……これは一度調べる必要があるそうね）

そんなことを考えながら、ユティスは今後の対応について思考を巡らせるのだった。

第4話 鋭意努力してます

鬱蒼^{うつそう}と木々が生い茂る森にある沼地の一角。日の光が遮られて辺りは薄暗く、じめじめとした空気が漂う。そんな中、ツグナは目の前の敵に向けて駆け出した。

「……シッ！」

「ギギイ！」

軽やかに跳ね、腰から引き抜いた短剣で獲物に斬り付ける。

相手はウイスプウッドと呼ばれる、沼地に生息する樹木型の魔物である。自在に伸びる枝で生き物を刺し殺して生き血を吸うという吸血鬼のような性質を持ち、普段は周辺の木々に紛れて姿を隠しているため、奇襲をかけるのは難しい。

だが、ツグナにはそんな隠敵^{いんてい}も意味を成さない。事前に「マップ」スキルで潜伏場所を絞り、「索敵」スキルで詳細な位置を把握しているからだ。相手の位置が分かれば、後は攻撃を仕掛けるだけである。

反射的に伸ばされた枝による刺突をかいくぐり、ツグナはウイスプウッドを叩き斬った。そのま

ま、事切れた魔物から討伐証明部位を剥ぎ取っていると、近くの茂みからびよこん、と薄茶色の尖った耳が突き出す。

「そっちは終わったのか？」

ツグナがその耳に向かって声をかける。すると間を置かず、茂みの奥からは「終わったよ」と嬉しげな声が聞こえてきた。

茂みを掻き分けて出てきたソアラは、にんまりと満面の笑みを浮かべ、「両手に持つ鉱石を嬉々^{きき}として見せつけた。

「ほら、こんなに採れたよ！」

両手一杯に抱えられたそれは、淡い炎を宿す鉱石だった。この鉱石は「鬼火石^{おにびいし}」といい、地球で言うところの石炭に相当する燃料源である。使用する際は、小さく砕いて中の炎を取り出し、火種とするのが一般的だ。

「うん、まずまずだな。質も問題なさそうだし……これで仕事は完了だ」

「だねー！」

ツグナはソアラから鬼火石を受け取ると、剥ぎ取りを終えたウイスプウッドの枝と一緒にスキルで出現させたアイテムボックスにしまい込む。今二人は、ギルドから出された依頼をこなすため、先日の試験が行われた森の端に位置する沼地を訪れていた。

「やれやれ、やっぱり俺一人じゃキツかったかもなあ……」

ツグナがそんなことをぼやきながらぐつと背を伸ばすと、コキコキと小気味よい音が鳴る。

沼地の魔物ウィル・オー・ウィスプは、ランタンに入れた鬼火石の仄かな光で生き物を自分のテリトリーに誘い込み、喰らう習性がある。鉱石であるはずの鬼火石が自然界のどこにあるかは不明で、現状ではこのランタンからしか採れない。一説には、このランタンが中の鉱石を変質させているとされるものの、詳しいメカニズムは分かっていない。

生息地が重なるため、鬼火石を採取しようとすると言っていると必ずと言っていいほどウィスプウッドとの戦闘も発生する。鬼火石採取の依頼を請け負う場合は、ウィスプウッドの討伐も一緒に受けるのが常識となっているほどであった。

「でへへえ☆……って——リルを呼び出せば、私がいなくてもよかつたんじゃないの？」

「あ、気付いたか」

「ビドっ！ ううっっ！」

実際のところ、召喚獣として高い実力を誇るリルは討伐任務に最適なのだが、ぶくつと頬を膨らませて抗議の意を示すソアラに、ツグナは「悪い悪い」と苦笑を浮かべる。

「下手に魔力を消費しなくて済むなら、それに越したことはないからな。それにリルじゃあ剥ぎ取りはできないし」

「それはどうだけどさあ……」

不満げなソアラの言い分はもつともで、剥ぎ取りを終えた状態でなくともギルドは買い取ってくれる。ただしその場合は、ギルド側が剥ぎ取る手間とコストを請け負うため、買い取り値はどうしても安くなってしまうのだが。

「さてと。求められた数は調達したし、そろそろ戻ろうぜ」

「そうだね。私もこのじめじめした場所から出たいよ」

十分に収穫を得たツグナとソアラは森を出て、街へと戻った。

あのキメラバイトの戦闘から約三週間が経った今、ツグナは木の葉月亭を拠点に、ギルドの依頼をこなす生活を送っていた。

「いつも不思議なんだけど、どうしてツグナはランクを上げようと思わないの？」

手を組んで大きく腕を伸ばしたソアラは「ほう」とひと息つくくと、隣を歩くツグナにそんな質問を投げかける。

冒険者を親に持つ彼女は、幼い頃からクエストやアイテムについての話を聞かされて育った。その中の一つに、認定試験を通ればギルドランクを上げられる、という話もあった。ソアラも多少ながら「いつかは自分も……」と憧れたものである。

それゆえ、ランクアップを積極的になしようとしれないツグナの姿勢はどこか腑に落ちなかった。

「う〜ん……何故、って言われても……あまり必要性を感じないんだよね。今のままでも受けられる依頼に制限があるわけでもないしさ」

ツグナはカリカリと頭を掻きながらそう答えた。彼の言う通り、ギルドで出されている依頼は、ギルドに所属してさえいればどのランクであっても受けることができる。

「でも、推奨ランクは設けられているじゃない？ 私たちはまだF-だけど、こうしてE-の依頼を受けてるし、この前はD-の依頼だって受けたよ」

ソアラは少しばかり心配な顔を浮かべながら食い下がる。

推奨ランクとは「その依頼を達成するために必要と思われるギルドランク」のことで、依頼内容や達成までの期日を考慮してギルド側が示す一つの指標である。

通常、冒険者は推奨ランクと依頼内容を吟味ぎんみした上で依頼を受けるか否かを決めるものだが、ツグナはそれを見ることすらしない。今回の「鬼火石の採取」クエストの推奨ランクは自分のものより三つも上ながら、ツグナは平気な顔で依頼用紙をカウンターへと持っていた。

受付のユティスは、それに若干顔を引きつらせながら対応していたものだ。

「って言ってもなあ……」

ツグナは「言いたいことも分かるけど」と苦笑する。

ソアラからすれば、「こんな調子で依頼を受けていれば、近いうちに命を落とす」と考えての言

葉だった。ツグナもそのことは理解している。だが「魔の森」と呼ばれるほど危険なカリギュア大森林で生活してきた彼としては、受ける依頼の全てが簡単に思えてならなかった。

もちろんランクを上げるメリットは存在する。各人の持つカードに記されたランクはいわば「ギルドからのお墨付き」だ。ランクが高ければ、それだけ信用が生まれる。依頼を指名されることもあり、高額な報酬を得るチャンスも増える。また、築き上げた信頼次第で、貴族に召し抱えられるケースも往々にしてある。そうなれば将来が約束されるということもあって、はじめからそれを狙って冒険者になる輩も多い。

（あそこに比べれば危険度が低いから、ついやりすぎてたかな。まだ登録したての俺たちが何をしよう、気にする人はいないだろうけど）

しかし、ツグナはそうした上昇志向は持っていない。過度な信用は依存と腐敗の温床となり、権力と名声は傲慢と嫉妬を呼ぶことを、生まれた屋敷で過ごした日々から学んでいたため、ランクを上げることあまり必要性を感じていなかった。

だが、想定と現実を得てして相違するものだ。ほぼ毎日のように依頼をこなすツグナとソアラの二人組は、この街でも既に有名になりつつあった。推奨ランクをガン無視して瞬く間に依頼を達成する命知らずなその様子から、本人の預かり知らぬところで「燃える星屑スターダスト」などという二つ名すら冠かされている。

「そのうち受けるよ。そのうち」

「ホント……?」

ツグナの真意を測るように、ソアラは下から覗き込んで訊ねる。いつもぴんと立っている狐耳は頭の上にへたりつき、ふさふさの尻尾の揺れも小さくなっていた。

「ホントにホントだつて。つーか、ソアラも一緒に受けるんだからな?」

分かつてるのかよと言外げんがいに聞いたですツグナの視線に、ソアラは狐耳を元氣よく立たせ、「もちろん!」と元氣よく返す。

(正直、面倒なんだよなあ……あのDS女王のこともあるし……)

少し肩を落としたツグナは、隣を歩くソアラに気付かれないよう小さくため息を吐いたのだった。

「うん? なんだ、アレ……」

ギルドカードを提示して門を潜ったツグナは、いつもと違う街の様子に違和感を覚えた。いつもなら夕暮れは買い物客で街が活気付く時間帯ではあるものの、中央の通りに人だかりができている光景は初めて見る。どこかそわそわした雰囲気がい、ひそひそと「えっ!? それ本当なの?」という声がツグナの耳に届いた。

「なになに? どうしたの?」

遅れてやって来たソアラも同じ光景を見つけ、ツグナに訊ねる。だがツグナとしても、「何かの催し物か?」というぐらいの考えしか浮かんでこなかった。

「今日つて祭りか何かあったっけか?」

「ふえっ? ……そんなことは聞いてないケド」

目の前の人だかりを視界に入れながらツグナが聞き返すと、ソアラはソアラで「ツグナの方こそ何か知らないの?」とでも言いたげに首を横に振って答える。

(まあ、俺たちには関係のないことか)

ツグナがそんな判断を下し、「それじゃ、ギルドに寄つてから帰るか」と人だかりを横目に通り過ぎようとした瞬間――

「あいだがっだよおおお!!」

真横から、とてつもない衝撃と柔らかな感触が襲いかかったのだった。

「ぐふっ!? ……なんなんだよ、つて――シルヴィ!?」

「うう!! うりうりい!! お姉さんに会いたかったでしょ!? そーなんでしょ!」

そのまま窒息死させる勢いと思いつきシルヴィにキツく抱きしめられた挙句、何度も頬を擦り寄せられ、ツグナはなすがまま、されるがままとなってしまう。あまりに突然すぎて、その顔は驚愕に染め上げられていた。

「全く、これだからコイツは……」

シルヴィの後ろから呆れた声が聞こえてくる。

ツグナはその声を聞いた瞬間、呆けた表情を声の主へと向けていた。

「一か月ぶりだな、ツグナ。元気なようで何よりだ」

ツグナの視線の先には――肩のところまで切り揃えた銀色の髪を揺らし、紫の瞳で見返して嬉しそうに微笑むリリアの姿があった。

第5話 成果報告と祝いの夜

カリギユア大森林の中にひっそりと立つ、一軒のログハウス調の家。その家の中から、いっつもと同じように叫び声が響く。

「ししよおおおく。会いに行きたいですよおおおく……！」

家の中では、腰まで届く長い金髪に翡翠色の瞳を備えた女性が、銀髪の女性にすがりついて懇願している。

金髪の女性の名はシルヴィア・レンリル。尖った耳が特徴の妖精族の女性である。一方の「師匠」

と呼ばれた銀髪の女性、リリアンヌ・クリストヴァルは、エルフと人間のハーフだった。

お茶を飲んでいたりリアは、今日も今日とて泣き喚くシルヴィに、イライラした顔で答えた。

「だあああああ！ 鬱陶しいっ！ お前はアイツのことを静かに待ってやれんのか！」

いい加減にしろ、と雷を落とされ、シルヴィは一時沈黙する。

この二人は生家から出て森をさまよっていたツグナを保護し、一緒に暮らしてきた、いわば家族同然の存在である。ツグナにはずっと魔法や戦術を教えてきたのだが、現在はその一環として、一か月間一人で暮らす試練を与えていた。

やがてシルヴィは、「で、でもお……」と目尻にうつつすらと涙を浮かべながら両手の人差し指をつんつんとつき出す。その様子はどこからどう見ても「お子様」という印象しか抱けないものだが、実際にはレベルも年齢もツグナよりはるかに上だ。

「明日で丁度一か月だろうに。じきアイツはここに帰ってくるだろうよ。お前だってそんなことぐらい分かっているじゃないか」

ため息を吐きながら、「全く……」とリリアはあからさまに肩を落としてみせる。だが、そんな様子の彼女に、思わぬ反撃が仕掛けられた。

「むう……そういう師匠こそ、最近どこか上の空じゃないですか。それに、知ってるんですよ？ 普段はずぼらな師匠が妙に服のコーディネートに気になったり、部屋を片付けたり……やっぱ、ツ

立ち読みサンプル
はここまで

グナが帰ってくるのを心待ちにしているじゃないんですか？」

「ぶふっ!? そ、そんなことはっ……!?」

「加えて、髪をイジっては待ち遠しそうな目のため息を吐くし、研究の方も手がつかないくらいソワソワしてるようですしねえ……」

ジトツとした目を向けるシルヴィの指摘に、リリアはただ視線を外してカップを傾げるだけだ。だがその顔には「痛いところを突かれた」という少し苦しげな表情が浮かんでいる。

「ふむ……では視察も兼ねて、街まで行ってみようではないか。ツグナがどのように過ごしているか見えてくるし、実地で話を聞いた方が想像もしやすいだろう」

話題を逸らすように、リリアはそんな理由にもならない言葉を並べてシルヴィに提案する。「私も連れて行ってくれるんですね!？」と満面の笑みを浮かべる弟子に、彼女はゆっくりと頷き——

「こっちから出向いて、ツグナの驚く面を見るとするか」

「ハイッ！」

どこか黒い笑みを浮かべるのだった。



「そっちからわざわざ来てくれなくても、報告に行ったのに」

リリアから「どうしてるか見に来た」と聞かされたツグナは、呆れ半分嬉しさ半分といった面持ちで思わず苦笑してしまった。

「ある程度目処がつくまでには時間がかかるだろう? それならいつそのこと、こっちから行って直接見た方が早いと思ってる。それに——そろそろシルヴィが限界なんだよ」

この一か月間ずっと不足していたツグナ成分(?)を一気に補充するが如く、シルヴィは先ほどからツグナに抱きついて離れない。そんな彼女を引き摺るようにして、一行はギルドへと向かっていった。

「ね、ねえツグナ……そのう、こちらの方々、は……?」

突然のことに名乗るタイミングを失っていたソアラが、おそるおそる訊ねる。

「うん? ああ、ソアラは会うの初めてだったよな……この二人はまあ、俺の家族? みたいな人で——」

後は頼むよ、とツグナはリリアの方に視線を投げる。リリアは軽く頷いて、ツグナの言葉を引き継いだ。

「リリアンヌはクリストヴァルだ。気軽にリリアと呼んでくれて構わない。ちなみに、そっちのしがみついているのは、私の弟子のシルヴィアはレンリルだ」